



教材・支援機器活用事例

【不器用さ、目盛りを読み間違える困難さがある児童への

“定規の使い方”への支援】

子どもについて	学校・学級・学年	小学校 知的障がい特別支援学級 高学年
	対象の障がい	知的障がい
	授業形態	小集団学習
学習上又は生活上の困難さ	子どもの特性や教育的ニーズ	<p>本児は、手先の不器用さが目立ち、細かな動きを必要とする操作的な活動に対する難しさがみられる。算数の測定の学習では、線の端を定規の0に合わせる事が難しい、正確に長さを測ることが難しい。点と点とを正確につなぐことも難しいため、作図も難しい。</p> <p>また、市販されている定規では、線や色等の情報が多いため、集中して目盛りを目で追うことが難しい、読み間違ってしまう様子もみられる。</p> <p>cmやmm等の長さの概念は理解しているだけに、定規等の教具を工夫することで、自分の力で解決できる成功経験を積み重ねさせ、学習の定着につなげたい。</p>
教材・支援機器活用	使用した支援機器・教材の名称	<p>「ロービジョン用定規」</p>  <p>定規の端が0になっているタイプ</p> 
	活用のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 定規を使って線の長さをはかる学習において、線の端を定規の0の目盛りに合わせることができる。 正確に目盛りを読むことができる。 決められた長さの線を引く学習において、定規の0の目盛の部分から線を引き始めることができる。
授業における支援 ・教材の配慮事項		<p>使い始めのうちは、線の端に鉛筆を当て、そこに定規の出っばりをひっかけるようにして0を合わせさせた。線を引く時も、同様にひっかけることで、きちんと0から書きはじめられた。慣れてきたら、0の目盛がくぼんでいるタイプの定規を使用し、その次は普通の定規だが目盛りが白黒で読みやすいものへと、段階的に教具を変えながら指導していく方針である。</p>
子どもの変容や評価		<p>不器用さから、線の箸を0に合わせられなかったり、認知面から、定規のメモリのどこに注目したらいいのか分からなかったりする困難さを、本教具の使用で克服し、自信につなげることができた。本来は視覚障がい者用の教材であるが、知的障がいに起因する不器用さ、追視、注視の難しさのある児童にも有効であった。</p>

0の目盛りのところが、鉛筆をひっかけられるように出っばっている。余分な情報がなく、見やすいコントラストである。

0の目盛りがくぼんでいるタイプがある。